第１１章

スヴァーヤンブヴァ・マヌ、

ドゥルヴァ・マハーラージャに停戦を求める

第１節

मैत्रेय उवाच
निशम्य गदतामेवमृषीणां धनुषि ध्रुवः ।
सन्दधेऽस्त्रमुपस्पृश्य यन्नारायणनिर्मितम् ॥ १ ॥

マイトゥレーヤ　ウヴァーチャ
maitreya uvāca

ニシャミャ　ガダターンム　エーヴァンム
niśamya gadatām evam

リシーナーンム　ダハヌシ　ドゥルヴァハ
ṛṣīṇāṁ dhanuṣi dhruvaḥ

サンダデヘー　ストゥランム　ウパスプリッシャ
sandadhe 'stram upaspṛśya

ヤン　ナーラーヤナ・ニルミタンム
yan nārāyaṇa-nirmitam

maitreyaḥ uvāca—聖者マイトゥレーヤが話し続けた; *niśamya*—聞いて; *gadatām*—その言葉; *evam*—そのように; *ṛṣīṇām*—聖者たちの; *dhanuṣi*—自分の弓に; *dhruvaḥ*—ドゥルヴァ・マハーラージャ; *sandadhe*—取り付けた; *astram*—矢; *upaspṛśya*—水に触れたあと; *yat*—〜であるもの; *nārāyaṇa*—ナーラーヤナによって; *nirmitam*—作られた。

シュリー・マイトゥレーヤが言った。「ヴィドゥラよ。偉大な聖者たちの励ましのことばを聞いたドゥルヴァ・マハーラージャは、水に触れてアーチャマナをおこない、主ナーラーヤナが作った矢を取りだし、弓にあてがった。

要旨解説

ドゥルヴァ・マハーラージャは、主ナーラーヤナ自身が作ったという矢をさずかっており、今その矢を弓にあてがい、ヤクシャ族が作りだした幻影を吹き飛ばそうとしています。『バガヴァッド・ギーター』（第７章・第14節）では*māṁ eva ye prapadyante māyām etāṁ taranti te*（マーンム　エーヴァ　イェー　プラパデャンテー　マーヤーンム　エータンム　タランティ　テー）と

言われています。ナーラーヤナ、すなわち最高人格主神の助けがなければ、幻想エネルギーの脅威に対抗することはできません。シュリー・チャイタンニャ・マハープラブも、この時代のためのすばらしい武器を私たちにさずけています。『シュリーマド・バーガヴァタム』で述べられている*sāṅgopāṅgāstra*（サーンゴーパーンガーストゥラ）です。現代に用意された*nārāyaṇāstra*（ナーラーヤナーストゥラ）「マーヤーを一掃する武器」は、主チャイタンニャとその交流者、アドヴァイタ・プラブ、ニテャーナンダ、ガダーダラ、シュリーヴァーサとともにハレー・クリシュナ・マントラを唱名する方法です。

第２節

सन्धीयमान एतस्मिन्माया गुह्यकनिर्मिताः ।
क्षिप्रं विनेशुर्विदुर ्चो शा ज्ञानोदये यथा ॥ २ ॥

サンディーヤマーナ　エータスミン
sandhīyamāna etasmin

マーヤー　グヒャカ・ニルミターハ
māyā guhyaka-nirmitāḥ

クシプランム　ヴィネーシュル　ヴィドゥラ
kṣipraṁ vineśur vidura

クレーシャー　ギャーノーダイェー　ヤタハー
kleśā jñānodaye yathā

sandhīyamāne—弓にあてがとうとする間; *etasmin*—このナーラーヤナーストラ; *māyāḥ*—幻影; *guhyaka-nirmitāḥ*—ヤクシャ族に作り出された; *kṣipram*—またたくまに; *vineśuḥ*—破壊された; *vidura*—おお、ヴィドゥラ; *kleśāḥ*—幻の苦痛と喜び; *jñāna-udaye*—知識の出現と共に; *yathā*—〜のように。

ドゥルヴァ・マハーラージャがナーラーヤナーストラの矢を弓にあてがった瞬間、ヤクシャ族が作りだした幻影はまたたくまに消えうせた。自己を完全に認識したときに、あらゆる物質的苦痛と喜びが消えさっていくように。

要旨解説

クリシュナは太陽、そしてクリシュナの幻想エネルギー・マーヤーは暗闇のようなものです。暗闇が光のない状態を指すように、マーヤーはクリシュナ意識のない状態を指します。クリシュナ意識とマーヤーはいつも、並行して存在しています。クリシュナ意識がめざめた瞬間、どのような幻の苦痛も喜びも消えていきます。*Māyām etāṁ taranti te*（マーヤーンム　エ

ーターンム　タランティ　テー）（『バガヴァッド・ギーター』第７章・第14節）。マハー・マントラを唱えつづけることが、私たちをマーヤーの幻想の力から解放させてくれるのです。

第３節

तस्यार्षास्त्रं धनुषि प्रयुञ्जतः
　　सुवर्णपुङ्खाः　कलहंसवाससः　।
विनिःसृता आविविशुर्द्विषद्बलं
　　यथा वनं भीमरवाः शिखण्डिनः ॥ ३ ॥

タッシャールシャーストゥランム　ダハヌシ　プラユンジャタハ
tasyārṣāstraṁ dhanuṣi prayuñjataḥ

スヴァルナ・プンカハーハ　カラハンムサ・ヴァーササハ
suvarṇa-puṅkhāḥ kalahaṁsa-vāsasaḥ

ヴィニフスリター　アーヴィヴィシュル　ドゥヴィシャドゥ・バランム
viniḥsṛtā āviviśur dviṣad-balaṁ

ヤタハー　ヴァナンム　ビヒーマ・ラヴァーハ　シカハンディナハ
yathā vanaṁ bhīma-ravāḥ śikhaṇḍinaḥ

tasya—ドゥルヴァが～したとき; *ārṣa-astram*—ナーラーヤナ・リシによって与えられた武器; *dhanuṣi*—自分の弓に; *prayuñjataḥ*—固定した; *suvarṇa-puṅkhāḥ*—黄金の軸の（矢）; *kalahaṁsa-vāsasaḥ*—白鳥の翼のような羽; *viniḥsṛtāḥ*—飛び出した; *āviviśuḥ*—入った; *dviṣat-balam*—敵兵; *yathā*—～のように; *vanam*—森の中に; *bhīma-ravāḥ*—けたたましい音をたてて; *śikhaṇḍinaḥ*—孔雀。

ドゥルヴァ・マハーラージャが、ナーラーヤナ・リシによって作られた武器を弓にあてがったそのとき、黄金の軸に白鳥の翼のような羽をつけたその矢はすぐさま飛びだした。そして轟音とともに敵兵のまっただ中に突入していった。孔雀が鋭い声をあげながら森にはいっていくように。

第４節

तैस्तिग्मधारैः प्रधने शिलीमुखै-
　　रितस्ततः पुण्यजना उपद्रुताः　।
तमभ्यधावन् कुपिता उदायुधाः
　　सुपर्णमुन्नद्धफणा इवाहयः　　॥ ४ ॥

タイス　ティグマ・ダハーライヒ　プラダハネー　シリー・ムカハイル
tais tigma-dhāraiḥ pradhane śilī-mukhair

イタス　タタハ　プニャ・ジャナー　ウパドゥルターハ
itas tataḥ puṇya-janā upadrutāḥ

タンム　アビャダハーヴァン　クピター　ウダーユダハーハ
tam abhyadhāvan kupitā udāyudhāḥ

スパルナンム　ウンナッダハ・パハナー　イヴァーハヤハ
suparṇam unnaddha-phaṇā ivāhayaḥ

taiḥ—それらによって; *tigma-dhāraiḥ*—鋭い切っ先の; *pradhane*—戦場で; *śilī-mukhaiḥ*—矢; *itaḥ tataḥ*—ここかしこ; *puṇya-janāḥ*—ヤクシャ族; *upadrutāḥ*—殺気だって; *tam*—ドゥルヴァ・マハーラージャに向かって; *abhyadhāvan*—突進した; *kupitāḥ*—怒って; *udāyudhāḥ*—武器を振り上げて; *suparṇam*—ガルダに向かって; *unnaddha-phaṇāḥ*—鎌首をもたげて; *iva*—〜のように; *ahayaḥ*—蛇。

鋭い矢が敵兵たちを動揺させ、なかには卒倒しかけた者もいる。が、戦場に居並ぶさまざまなヤクシャ族はドゥルヴァ・マハーラージャに激しい敵対心を燃やし、かろうじて武器をかき集め、いっせいに攻撃を再開した。ガルダに挑発された蛇たちが鎌首をもたげてガルダに突進するかのように。

第５節

स तान् पृषत्कैरभिधावतो मृधे
निकृत्तबाहूरुशिरोधरोदरान् ।
निनाय लोकं परमर्कमण्डलं
व्रजन्ति निर्भिद्य यमूर्ध्वरेतसः ॥ ५ ॥

サ　ターン　プリシャトゥカイル　アビヒダハーヴァトー　ムリデヘー
sa tān pṛṣatkair abhidhāvato mṛdhe

ニクリッタ・バーフール・シローダハローダラーン
nikṛtta-bāhūru-śirodharodarān

ニナーヤ　ローカンム　パランム　アルカ・マンダランム
nināya lokaṁ param arka-maṇḍalaṁ

ヴラジャンティ　ニルビヒデャ　ヤンム　ウールドゥヴァ・レータサハ
vrajanti nirbhidya yam ūrdhva-retasaḥ

saḥ—彼（ドゥルヴァ・マハーラージャ）; *tān*—すべてのヤクシャ族; *pṛṣatkaiḥ*—彼の矢によって; *abhidhāvataḥ*—進んでくる; *mṛdhe*—戦場で; *nikṛtta*—切り離されて; *bāhu*—腕;

ūru—腿; *śiraḥ-dhara*—首; *udarān*—そして腹部; *ninaya*—送った; *lokam*—その惑星に; *param*—最上の; *arka-maṇḍalam*—太陽; *vrajanti*—行く; *nirbhidya*—貫いている; *yam*—それに; *ūrdhva-retasaḥ*—いつ何時も射精をしない者たち。

ヤクシャ族たちが突進してくるのを見たドゥルヴァ・マハーラージャは、すぐさま矢を放ち、かれらを打ち砕いた。かれらの腕、足、頭、腹を胴体から切り離し、決して射精しない最上のブラフマチャーリーだけが行けるという、太陽の上位にある天体系にヤクシャ族を送った。

要旨解説

主に、あるいは主の献愛者に殺されるのは、献愛者でない人々には喜ばしいことです。ヤクシャ族はドゥルヴァ・マハーラージャに手当たり次第に殺されましたが、決して射精しないブラフマチャーリーだけが行ける天体系に高められました。主に殺される非人格論者のギャーニーや悪魔たちはブラフマローカ、あるいはサテャローカに高められます。この節のいうサテャローカに到達するには、太陽よりもさらに上に行かなくてはなりません。ですから、殺すことが悪いとはかぎらないのです。その殺害が偉大な儀式として最高人格主神や献愛者によってなされれば、殺される生命体には恩恵になります。よく言われる非暴力の概念は、最高人格主神あるいは献愛者による殺害とは比較の対象にもなりません。王や国が殺人者を殺すことは、殺人を犯した者を救うことになります。罪の反動がすべて解消されるからです。

この節で重要なことばは*ūrdhva-retasaḥ*（ウールドゥヴァ・レータサハ）で、これは「決して射精をしないブラフマチャーリー」という意味です。独身であることには重要な意味があり、ヴェーダで定められている苦行、改悛、儀式を経験しなくても、純粋なブラフマチャーリー、すなわち精液を出さない生涯をおくった結果、死んだあとサテャローカに高められます。一般的に、性生活にはさまざまな制限が設けられており、グリハスタだけが制限付の性生活を送ることができます。それ以外の人々は、セックスを断たなくてはなりません。現代人は射精しないことの価値を知らないため、物質的な質を強め、もろもろの束縛をうけ、苦闘だけの生活を強いられます。「ウールドゥヴァ・レータサハ」は、とくに、厳格な苦行の原則に従うマーヤーヴァーディーのサンニャーシーを指しています。しかし、『バガヴァッド・ギーター』（第８章・第16節）で主は、*ābrahma-bhuvanāl lokāḥ punar āvartino 'rjuna*（アーブラフマ・ブヴァナール　ローカーハ　プナル　アーヴァルティノー　ルジュナ）、たとえブラフマローカまで高められてもふたたびもどってこなくてはならない、と言っています。ですから、ほんとうのムクティ（*mukti*）・解脱は、献愛奉仕だけによって達成できるものです。献愛奉仕をすればブラフマローカよりも高い場所、そして行けば決してもどってこない精神界に高められるからです。マーヤーヴァーディーのサンニャーシーは解脱したと自慢げに言いますが、

ほんとうの解脱は、献愛奉仕をとおして至高主と接触しないかぎり達成できるものではありません。ヴェーダ経典では、*hariṁ vinā na mṛtim taranti*（ハリンム　ヴィナー　ナ　ムリティンム　タランティ）、クリシュナの慈悲がなければ、だれも解脱を達成することはできない、と言われています。

第６節

तान् हन्यमानानभिवीक्ष्य गुह्यका-
ननागसश्चित्ररथेन भूरिशः ।
औत्तानपादिं कृपया पितामहो
मनुर्जगादोपगतः सहर्षिभिः ॥ ६ ॥

ターン　ハニャマーナーン　アビヒヴィークッシャ　グヒャカーン
tān hanyamānān abhivīkṣya guhyakān

アナーガサシュ　チトゥラ・ラテヘーナ　ブフーリシャハ
anāgasaś citra-rathena bhūriśaḥ

アウッターナパーディンム　クリパヤー　ピターマホー
auttānapādiṁ kṛpayā pitāmaho

マヌル　ジャガードーパガタハ　サハルシビヒヒ
manur jagādopagataḥ saharṣibhiḥ

tān—そのヤクシャ族たち; *hanyamānān*—殺されて; *abhivīkṣya*—見ている; *guhyakān*—ヤクシャ族; *anāgasaḥ*—罪のない; *citra-rathena*—美しい戦闘馬車を持つドゥルヴァ・マハーラージャによって; *bhūriśaḥ*—非常に; *auttānapādim*—ウッターナパーダの子に; *kṛpayā*—慈悲の心から; *pitā-mahaḥ*—祖父; *manuḥ*—スヴァーヤンブヴァ・マヌ; *jagāda*—教えを授けた; *upagataḥ*—近づいた; *saha-ṛṣibhiḥ*—偉大な聖者たちと。

孫のドゥルヴァ・マハーラージャが、罪のない数多くのヤクシャ族たちを殺害している様を見たスヴァーヤンブヴァ・マヌは、優れた教えをさずけようと、深い哀れみの心でドゥルヴァに語りかけた。

要旨解説

ドゥルヴァ・マハーラージャはアラカープリーを攻撃しましたが、それは弟ウッタマがひとりのヤクシャ族に殺されたからです。全員ではなく、たったひとりのヤクシャに殺した罪がありました。もちろんドゥルヴァ・マハーラージャは、弟が殺されたことに容赦ない報復をし、宣戦布告したあと戦いが始まりました。現代も同じことがおこります——ひとりの過

ちゆえに国全体が攻撃を受けたりします。しかし、このような大規模な攻撃は、人類の父そして立法者であるマヌには認められませんでした。だからこそ、孫のドゥルヴァが罪のないヤクシャ族をそれ以上殺害しないよう止めに入ったのです。

第７節

मनुरुवाच
अलं वत्सातिरोषेण तमोद्वारेण पाप्मना ।
येन पुण्यजनानेतानवधीस्त्वमनागसः ॥ ७ ॥

マヌル　ウヴァーチャ
manur uvāca

アランム　ヴァトゥサーティローシェーナ
alaṁ vatsātiroṣeṇa

タモー・ドゥヴァーレーナ　パープマナー
tamo-dvāreṇa pāpmanā

イェーナ　プニャ・ジャナーン　エーターン
yena puṇya-janān etān

アヴァディース　トゥヴァンム　アナーガサハ
avadhīs tvam anāgasaḥ

manuḥ uvāca—マヌが言った; *alam*—十分; *vatsa*—我が子よ; *atiroṣeṇa*—過度の怒りで; *tamaḥ-dvāreṇa*—無知の道; *pāpmanā*—罪深い; *yena*—それによって; *puṇya-janān*—ヤクシャ族; *etān*—これらすべて; *avadhīḥ*—お前が殺した; *tvam*—お前; *anāgasaḥ*—罪のない者たち

主マヌが言った。「我が子よ。殺戮をやめるのだ。むやみに怒ってはならない——それは悲惨な生活に転落する道だ。じつは罪をおかしていないヤクシャ族たちを、おまえは度を越して殺している。

要旨解説

この節にある*atiroṣeṇa*（アティローシェーナ）は「度を越した怒り」という意味です。ドゥルヴァ・マハーラージャが自分の怒りを抑制できなくなったとき、祖父のスヴァーヤンブヴァ・マヌは、ドゥルヴァが罪をかさねないよう守るためにすぐさま駆けつけました。この出来事から私たちが理解できるのは、殺すことは必ずしも悪くはなくても、度が過ぎれば、あるいは罪のない人が殺されるのであれば、その殺害は地獄につながる道になります。ドゥル

ヴァ・マハーラージャは偉大な献愛者だったために、そのような罪なおこないから救われました。

クシャトリヤは国の法律や秩序を維持するために殺すことが許されています。理由なくして殺したり暴力をふるったりすることは許されません。確かに暴力は悲惨な生活に転落する道ですが、国の法律や秩序を維持するには必要です。ここで主マヌは、ドゥルヴァ・マハーラージャがヤクシャ族を殺すことを禁止しました。それは、ドゥルヴァの弟ウッタマーを殺害した罰を受けるのはひとりのはずだからです。ヤクシャたち全員が罰せられるべきではありませんでした。しかし現代の戦争では、落ち度のない一般市民にまで攻撃が加えられます。マヌの法則は、そのような戦争は罪な活動と戒めています。また現代では、文化国家が数多くの屠殺場を作って罪のない動物たちを殺しています。国が敵に攻撃され、市民までが殺される事態は、かれら自身の悪業の反動と解釈しなくてはなりません。それが自然の法則なのです。

第８節

नास्मत्कुलोचितं तात कर्मैतत्सद्विगर्हितम् ।
वधो यदुपदेवानामारब्धस्तेऽकृतैनसाम् ॥ ८ ॥

ナースマトゥ・クローチタンム　ターター
nāsmat-kulocitaṁ tāta

カルマイタトゥ　サドゥ・ヴィガルヒタンム
karmaitat sad-vigarhitam

ヴァドホー　ヤドゥ　ウパデーヴァーナーンム
vadho yad upadevānām

アーラブダハス　テー　クリタイナサーンム
ārabdhas te 'kṛtainasām

na—ではない; *asmat-kula*—我々の家系; *ucitam*—ふさわしい; *tāta*—我が子よ; *karma*—行為; *etat*—これ; *sat*—宗教に関する権威によって; *vigarhitam*—禁止されて; *vadhaḥ*—その殺害; *yat*—〜であること; *upadevānām*—ヤクシャ族の; *ārabdhaḥ*—実行された; *te*—お前によって; *akṛta-enasām*—罪のない者たちの。

我が子よ。罪のないヤクシャ族たちを殺すことは権威者に認められておらず、宗教と無宗教の法律を知るとされる我々の家系にはふさわしくない。

第９節

नन्वेकस्यापराधेन प्रसङ्गाद् बहवो हताः ।
भ्रातुर्वधाभितप्तेन त्वयाङ्ग भ्रातृवत्सल ॥ ९ ॥

ナンヴ　エーカッシャーパラーデへーナ
nanv ekasyāparādhena

プラサンガードゥ　バハヴォー　ハターハ
prasaṅgād bahavo hatāḥ

ブァラートゥル　ヴァダハービヒタプテーナ
bhrātur vadhābhitaptena

トゥヴァヤーンガ　ブァラートゥリ・ヴァトゥサラ
tvayāṅga bhrātṛ-vatsala

nanu—確かに; *ekasya*—（ヤクシャ族）の一人; *aparādhena*—その犯罪; *prasaṅgāt*—彼らとの交流のために; *bahavaḥ*—多くの; *hatāḥ*—殺された; *bhrātuḥ*—お前の弟の; *vadha*—死によって; *abhitaptena*—悲しんで; *tvayā*—お前によって; *aṅga*—我が子よ; *bhrātṛ-vatsala*—弟への愛情。

我が子よ。おまえが弟に深い愛情を持ち、ヤクシャ族に殺されたことで深く悲しんでいることは事実だ。しかし、よく考えてもみよ。ひとりのヤクシャ族の犯罪のために、お前は罪のない他の多くのヤクシャたちを殺してしまったのだ。

第１０節

नायं मार्गो हि साधूनां हृषीकेशानुवर्तिनाम् ।
यदात्मानं पराग्गृह्य पशुवद्भूतवैशसम् ॥ १० ॥

ナーヤンム　マールゴー　ヒ　サードゥーナーンム
nāyaṁ mārgo hi sādhūnāṁ

フリシーケーシャーヌヴァルティナーンム
hṛṣīkeśānuvartinām

ヤドゥ　アートゥマーナンム　パラーグ　グリヒャ
yad ātmānaṁ parāg gṛhya

パシュヴァドゥ　ブァータ・ヴァイシャサンム
paśuvad bhūta-vaiśasam

na—決して～ない; *ayam*—これ; *mārgaḥ*—道; *hi*—確かに; *sādhūnām*—正直な人物の; *hṛṣīkeśa*—最高人格主神の; *anuvartinām*—道に従うこと; *yat*—～であるもの;

ātmānam—自己; *parāk*—肉体; *gṛhya*—〜であると考えている; *paśu-vat*—動物のように; *bhūta*—生命体の; *vaiśasam*—殺すこと。

肉体を自己と考え、他人の肉体を殺してはならない。それは動物じみた考えである。そのような行為は、最高人格主神への奉仕の道に従う神聖な人物によってとくに禁じられている。

要旨解説

この節にある*sādhūnāṁ hṛṣīkeśānuvartinām*（サードゥーナーンム　フリシーケーシャーヌヴァルティナーンム）はひじょうに重要です。サードゥ（*Sādhu*）は「神聖な人物」のことです。しかし、神聖な人物とはだれを指すのでしょうか。最高人格主神、フリシーケーシャに奉仕をする道に従っている人物です。『ナーラダ・パンチャラートラ』には（フリシーケーナ　フリシーケーシャ・セーヴァナンム　バハクティル　ウッチャテー）とあります（『チャタンニャ・チャリタームリタ』マデャ・第19章・第170節）。自分の感覚を使って最高人格主神に心をこめて仕えることがバクティ、すなわち献愛奉仕である、という意味です。ですから、すでに主に仕えている人物が、はたして自分の感覚を満たそうとするものでしょうか。ここでドゥルヴァ・マハーラージャは主マヌに、おまえは主の純粋な召使いである、と戒められています。ならばなぜ、動物のように、肉体観念に囚われているのでしょうか。動物は、他の動物の肉体を自分の食糧だと考えます。だから肉体観念に動かされているかれらは、ほかの動物を攻撃するのです。人間、とくに主の献愛者は、このように行動してはいけません。サードゥ、神聖な献愛者は、不必要に動物を殺すことはありません。

第１１節

सर्वभूतात्मभावेन भूतावासं हरिं भवान् ।
आराध्याप दुराराध्यं विष्णोस्तत्परमं पदम् ॥ ११ ॥

サルヴァ・ブフータートゥマ・バハーヴェーナ
sarva-bhūtātma-bhāvena

ブフーターヴァーサンム　ハリンム　バハヴァーン
bhūtāvāsaṁ hariṁ bhavān

アーラーデャーパ　ドゥラーラーデャンム
ārādhyāpa durārādhyaṁ

ヴィシュノース　タトゥ　パラマンム　パダンム
viṣṇos tat paramaṁ padam

sarva-bhūta—全生命体の中に *ātma*—至高の魂に; *bhāvena*—瞑想と共に; *bhūta*—全生存の; *āvāsam*—その住居; *harim*—主ハリ; *bhavān*—あなた; *ārādhya*—崇拝によって; *āpa*—到達して; *durārādhyam*—宥めることが非常に難しい; *viṣṇoḥ*—主ヴィシュヌの; *tat*—それ; *paramam*—至高の; *padam*—立場。

ヴァイクンタ惑星のなかにあるハリの精神的住居に到達すことはきわめてむずかしいが、おまえはひじょうに幸運だから、全生命体の至高の住居としての主を崇拝することで、その住居に行く定めにある。

要旨解説

生命体がもつ肉体は、精神魂と至高の魂がいなければ存在することさえできません。精神魂は、原子のなかにでさえいる至高の魂に依存しています。物質であろうと精神であろうと、すべては至高主に依存しているため、この節で至高主は*bhūtāvāsa*（ブゥーターヴァーサ）という言葉で言及されています。ドゥルヴァ・マハーラージャはクシャトリヤでしたから、戦うことをやめるよう指示する祖父のマヌに「クシャトリヤだから敵と戦うのは当然ではありませんか」と反論できたのですが、同時に、生命体の肉体は至高主の住む場所だから主の寺院である、だからどの生命体であっても不必要に殺すことは許されない、と教えられたのでした。

第１２節

स त्वं हरेरनुध्यातस्तत्पुंसामपि सम्मतः ।
कथं त्ववद्यं कृतवाननुशिक्षन् सतां व्रतम् ॥ १२ ॥

サ　トゥヴァンム　ハレール　アヌデャータス
sa tvaṁ harer anudhyātas

タトゥ・プンムサーンム　アピ　サンムマタハ
tat-puṁsām api sammataḥ

カタハンム　トゥヴ　アヴァデャンム　クリタヴァーン
kathaṁ tv avadyaṁ kṛtavān

アヌシクシャン　サターンム　ヴラタンム
anuśikṣan satāṁ vratam

saḥ—その人物; *tvam*—お前; *hareḥ*—至高主によって; *anudhyātaḥ*—いつも思い出されている; *tat*—主の; *puṁsām*—献愛者たちによって; *api*—もまた; *sammataḥ*—尊重されて; *katham*—なぜ; *tu*—では; *avadyam*—忌まわしい（行動）; *kṛtavān*—お前がしている; *anuśikṣan*—模範を示すこと; *satām*—神聖な人物の; *vratam*—誓い。

おまえは主の純粋な献愛者だから、主はいつもおまえのことを考え、また主の親密な献愛者たちからいつも高く評価されている。おまえの生涯は模範をしめすためにある。だから私は驚いている——おまえがこのような忌まわしいおこないをしていることに。

要旨解説

ドゥルヴァ・マハーラージャは純粋な献愛者であり、いつも主のことを考えていました。その思いに応えて主も、１日24時間いつも主のことだけを考えている純粋な献愛者のことを考えています。純粋な献愛者が主以外になにも知らないように、主も純粋な献愛者以外はなにも知りません。スヴァーヤンブヴァ・マヌはこの事実をドゥルヴァ・マハーラージャに指摘しました。「おまえは純粋な献愛者である。それだけではない、あらゆる純粋な献愛者から高く評価されている。ならば、だれもがおまえの行動から学べるように、模範をしめさなくてはならないはずだ。そのことを考えると、おまえが罪のないヤクシャ族を数多く殺してしまったことに、私は驚いている」。

第１３節

तितिक्षया करुणया मैत्र्या चाखिलजन्तुषु ।
समत्वेन च सर्वात्मा भगवान् सम्प्रसीदति ॥ १३ ॥

ティティクシャヤー　カルナヤー
titikṣayā karuṇayā

マイトゥリャー　チャーキヒラ・ジャントゥシュ
maitryā cākhila-jantuṣu

サマトゥヴェーナ　チャ　サルヴァートゥマー
samatvena ca sarvātmā

バハガヴァーン　サンムプラシーダティ
bhagavān samprasīdati

titikṣayā—忍耐心で; *karuṇayā*—慈悲の心で; *maitryā*—友好的な気持ちで; *ca*—もまた; *akhila*—共通の; *jantuṣu*—生命体たちに; *samatvena*—均衡に; *ca*—もまた; *sarva-ātmā*—超霊魂; *bhagavān*—人格主神; *samprasīdati*—非常に満足する。

主は献愛者が、忍耐心、慈悲心、友愛心、平等心で人々と接するとき、このうえなく満足してくださる。

要旨解説

献愛奉仕の二番目の完成境地にいる高尚な献愛者には、この節の教えどおりに行動する義務があります。献愛奉仕には三段階があります。一番低い段階にいる献愛者の心はただ寺院の神像だけに向けられ、規則や原則に従いながら強い熱意で主を崇拝します。二番目の段階にいる献愛者は、主との絆、仲間の献愛者、悪気のない人々、そして悪意のある人々との関係を意識しています。献愛者は悪意ある人々に虐待されることがありますが、そのようなとき、高尚な献愛者は忍耐強く行動します。無知、あるいは悪気のない人々には深い慈悲の心で接しなくてはなりません。布教をする献愛者は、そのような人々が献愛奉仕に高められるよう、慈悲をしめしながら行動する必要があります。本来は、だれでも神の永遠な召使いです。ですから献愛者の本分は、人々の心にクリシュナ意識を甦らせることにあります。それがほんとうの慈悲です。同じ段階にある献愛者とは親しい友として交流すべきです。また一般の人々に対しては、すべての生物は至高主の部分体である、という普遍的な視野を持たなくてはなりません。さまざまな生命体が多種多様の衣服をまとってこの世に誕生していますが、『バガヴァッド・ギーター』は「博識な人物はどの生物も平等に見る」と説いています。至高主は、献愛者のそのような資質を高く評価します。このため、神聖な人物は、いつも忍耐強く、慈悲深く、だれにでも友好的で、だれをも敵視せず、そしていつも心が穏やかである、と言われています。これらが献愛者のそなえる優れた気質です。

第１４節

सम्प्रसन्ने भगवति पुरुषः प्राकृतैर्गुणैः ।
विमुक्तो जीवनिर्मुक्तो ब्रह्म निर्वाणमृच्छति ॥ १४ ॥

サンムプラサンネー　バハガヴァティ
samprasanne bhagavati

プルシャハ　プラークリタイル　グナイヒ
puruṣaḥ prākṛtair guṇaiḥ

ヴィムクトー　ジーヴァ・ニルムクトー
vimukto jīva-nirmukto

ブラフマ　ニルヴァーナンム　リッチャティ
brahma nirvāṇam ṛcchati

samprasanne—満足を得て; *bhagavati*—最高人格主神の; *puruṣaḥ*—人物; *prākṛtaiḥ*—物質界から; *guṇaiḥ*—自然界の様式; *vimuktaḥ*—解放されて; *jīva-nirmuktaḥ*—希薄な体からも解放されて; *brahma*—無限の; *nirvāṇam*—精神的な至福; *ṛcchati*—達成する。

最高人格主神をほんとうに満足させられる生涯を送る人物は、濃密・希薄いずれの物質的状態からも解放される。自然の物質様式すべてから自由になった結果、尽きることのない精神的至福を味わえるのである。

要旨解説

前の節では、すべての生物に忍耐心、慈悲心、友愛心、平等心で接するべきである、と説明されました。そのような行動が最高人格主神を満足させるのであり、主の満足があってこそ、献愛者はすぐにあらゆる物質的状態から解放されます。主もそのように『バガヴァッド・ギーター』で確証しています。「わたしへの奉仕に真剣に、そして誠実に取りくんでいる者は、無限の精神的至福を満喫できる崇高な境地にすぐに到達する」。物質界にいる人々はだれでも、喜びにあふれた生活を得るために苦闘しています。しかしあいにく、その生活を得る方法がわかっていません。無神論者は神を信じていませんから、もちろん主を満足させることは考えていません。この節では、最高人格主神を喜ばせられる人はすぐに精神的境地に高められ、無限の喜びに満ちた生活を手に入れることができる、と明確に説かれています。物質存在から解放される、とは、物質自然の影響から解放される、ということを指します。

この節で使われている*samprasanne*（サンムプラサンネー）は「満足して」という意味です。私たちは、自分の行為に主が満足してくれるよう行動しなくてはなりません。自分が満足する、ということではないのです。もちろん、主が満足すれば献愛者もおのずと満足するものです。これがバクティ・ヨーガを修練する秘訣です。バクティ・ヨーガ以外の方法では、だれもが自分を満足させることを考えています。だれひとり、主を満足させようとはしていません。カルミー（*karmī*）は自分の感覚をできるだけ満たそうとしますが、知識を高めた境地にいる人でも、やはり無意識のうちに自分を満足させようとしています。カルミーは感覚満足で自分を満足させ、ギャーニー（*jñānī*）は繊細な活動で、つまり推論をとおして自分が神になったと考えています。ヨーギーも、さまざまなヨーガを完成できると考えて満足しようと考えています。しかしじつは、最高人格主神を満足させられるのは献愛者しかいません。献愛者が修練する自己の悟りの方法は、カルミー、ギャーニー、ヨーギーとはまったく違います。だれもが自分を満足させようとしているのに対し、献愛者は主だけを満足させようとします。献愛奉仕は、他の方法とはまったく次元が違っています。感覚を主への愛情奉仕に使って主を喜ばせるために働けば、献愛者はすぐさま超越的な境地に高められ、そして尽きることのない至福に満ちた生活を満喫できるのです。

第１５節

भूतैः पञ्चभिरारब्धैर्योषित्पुरुष एव हि ।
तयोर्व्यवायात्सम्भूतिर्योषित्पुरुषयोरिह ॥ १५ ॥

ブァータイヒ　パンチャビヒル　アーラブダハイル
bhūtaiḥ pañcabhir ārabdhair

ヨーシトゥ　プルシャ　エーヴァ　ヒ
yoṣit puruṣa eva hi

タヨール　ヴャヴァーヤートゥ　サンムブァーティル
tayor vyavāyāt sambhūtir

ヨーシトゥ・プルシャヨール　イハ
yoṣit-puruṣayor iha

bhūtaiḥ—物質要素によって; *pañcabhiḥ*—５つ; *ārabdhaiḥ*—作られて; *yoṣit*—女性; *puruṣaḥ*—男性; *eva*—ちょうどそのように; *hi*—確かに; *tayoḥ*—それらの; *vyavāyāt*—性生活によって; *sambhūtiḥ*—さらなる創造; *yoṣit*—女性の; *puruṣayoḥ*—そして男性の; *iha*—この物質界で。

物質界の創造は５つの物質要素から始まり、したがって、男性と女性の体を含むすべてがその要素によって作りだされる。男性と女性の性生活によって、物質界の男性と女性の数がさらに増加していく。

要旨解説

スヴァーヤンブヴァ・マヌは、ドゥルヴァ・マハーラージャがヴァイシュナヴァの哲学を理解したことを確認しましたが、弟の死に不快感をいだいている様子を見て、肉体が物質自然の５つの要素によって作られることを説明しています。『バガヴァッド・ギーター』（第3章・第27節）でもそのことが*prakṛteḥ kriyamāṇāni*（プラクリテーヘ　クリヤマーナーニ）「すべては自然界の物質様式によって創造され、維持され、破壊される」と確証されています。もちろんその背後には、最高人格主神の指揮が存在します。そのことも『バガヴァッド・ギーター』（第9章・第10節）で、 *mayādhyakṣeṇa*（マヤーデャクシェーナ）と確証されています。第９章でクリシュナは、「わたしの指揮下で物質自然界は動いている」と言っています。スヴァーヤンブヴァ・マヌはドゥルヴァ・マハーラージャに、弟の肉体の死はヤクシャ族の落ち度ではなく、物質自然の作用で生じたもの、ということを納得させたかったのです。最高人格主神は計りしれない力を無限にそなえ、その力は目に見える、あるいは見えない形で作用します。

宇宙の創造はその強大な力によるもので、土、水、火、空気、空間という５つの要素だけで目に見える形として具体化されます。同じように、全生命体の肉体は、人間、半神、動物、鳥など、どのような肉体でも、その５つの要素で作られ、その生物たちの性的結合によってその数はさらに増大していきます。それが創造、維持、破壊の過程です。この過程によって生じる物質自然界の波に乱されてはなりません。ドゥルヴァ・マハーラージャは、弟の死に

心を痛めてはいけない、と間接的に忠告されています。肉体同士のつながりは完全に物質的だからです。ほんとうの自己、すなわち精神魂は、だれによっても、消滅させられることも殺害されることもありません。

第１６節

एवं प्रवर्तते सर्गः स्थितिः संयम एव च ।
गुणव्यतिकराद्राजन् मायया परमात्मनः ॥ १६ ॥

エーヴァンム　プラヴァルタテー　サルガハ
evaṁ pravartate sargaḥ

スティティヒ　サンムヤマ　エーヴァ　チャ
sthitiḥ saṁyama eva ca

グナ・ヴャティカラードゥ　ラージャン
guṇa-vyatikarād rājan

マーヤヤー　パラマートゥマナハ
māyayā paramātmanaḥ

evam—このように; *pravartate*—起こる; *sargaḥ*—創造; *sthitiḥ*—維持; *saṁyamaḥ*—破壊; *eva*—確かに; *ca*—そして; *guṇa*—様式の; *vyatikarāt*—相互作用によって; *rājan*—王よ; *māyayā*—幻想エネルギーによって; *parama-ātmanaḥ*—最高人格主神の。

マヌがことばをつづけた。「ドゥルヴァ王よ。創造、維持、破壊が起こるのは、最高人格主神が持つ幻想の物質の力と、物質自然界の三様式の相互作用にすぎない」

要旨解説

最初に、物質自然界の５つの要素で創造がなされます。次に物質自然の様式の相互作用で維持がなされます。子どもが生まれると、両親はすぐにその子を維持する、つまり養おうとします。子孫を維持するという傾向は、人間だけではなく動物の世界にも見られます。動物を殺す習性のある虎でさえ、自分の子どもの世話をします。自然界の物質様式の相互作用によって、創造、維持、破壊が必然的に生じます。しかし同時に、そのすべてが最高人格主神の指揮下起こっていることも知る必要があります。すべてはその過程によって生じるのです。創造はラジョー・グナ・激性の作用で、維持はサットヴァ・グナ・徳性の作用で、さらに破壊はタモー・グナ・無知の作用で生じます。徳性の様式にいる人々は、タモー・グナやラジョー・グナの人たちよりも寿命が長いことがわかります。言いかえると、徳性の様式を高めれば、ひじょうに長い寿命が与えられる高位の天体系に高められるということです。

Ūrdhvaṁ gacchanti sattva-sthāḥ（ウールドゥヴァンム　ガッチャンティ　サットゥヴァ・スタハーハ）（『バガヴァッド・ギーター』第14章・第18節）。これは「徳性の様式・サットヴァ・グナにいる偉大なリシ、聖者、サンニャーシーは、高位の天体系に高められる」という意味です。その徳性の様式さえも超越した人々は純粋な徳性に入り、やがて精神界での永遠な生活に到達します。

第１７節

निमित्तमात्रं तत्रासीन्निर्गुणः पुरुषर्षभः ।
व्यक्ताव्यक्तमिदं विश्वं यत्र भ्रमति लोहवत् ॥ १७ ॥

ニミッタ・マートゥランム　タトゥラーシーン
nimitta-mātraṁ tatrāsīn

ニルグナハ　プルシャルシャバハハ
nirguṇaḥ puruṣarṣabhaḥ

ヴャクターヴャクタンム　イダンム　ヴィシュヴァンム
vyaktāvyaktam idaṁ viśvaṁ

ヤトゥラ　ブァラマティ　ローハヴァトゥ
yatra bhramati lohavat

nimitta-mātram—間接的な原因; *tatra*—そのとき; *āsīt*—～だった; *nirguṇaḥ*—穢れていない; *puruṣa-ṛṣabhaḥ*—至高の人物; *vyakta*—表わされた; *avyaktam*—表わされていない; *idam*—この; *viśvam*—世界; *yatra*—～の場所; *bhramati*—動く; *loha-vat*—鉄のように。

ドゥルヴァよ。最高人格主神は、自然の物質様式に穢されていない方である。この物質宇宙具現界の創造の間接的原因でもある。主がその刺激を与えると、他の多くの原因と結果が発生し、こうして全宇宙が機能しはじめる。物体を結合する力を持つ磁石によって鉄が動くように。

要旨解説

最高人格主神の外的力が物質界でどのように機能するかが、この節で説明されています。すべては至高主の力によって起こっています。最高人格主神が創造の根源であることを否定する無神論哲学者は、物質界はさまざまな物質要素の動・反動で動いていると考えます。物質要素が反応するわかりやすい例として、ソーダと酸の混合による発泡現象が挙げられます。しかし、そのような化学物質から生命を作りだすことはできません。生物の種類には、さまざまな望みや活動に応じて、840万種類あります。物質の力が機能している原因は、化学物

質の動きだけでは説明できません。陶芸家と「ろくろ」の例から、物質と生命体の関係が理解できます。ろくろが回転し、さまざまな土器が作りだされます。土器の原因はいくつもあるでしょうが、元の原因はろくろに力を加えて回転させる陶芸家です。その力は陶芸家の意志によって作られます。同じ考えが『バガヴァッド・ギーター』で、「物質の動・反動の背後にクリシュナ・最高人格主神がいる」と述べられています。クリシュナは、「すべてはわたしのエネルギーに依存している、しかしわたしはどこにもいない」と言います。容器は物質エネルギーの動・反動という特定の条件下で作られますが、陶芸家はその容器のなかにいるわけではありません。同じように、物質創造界は主によって用意されましたが、なおかつ主は離れた場所にいます。ヴェーダが述べているように、主が宇宙を見つめるだけで、その瞬間から物体の刺激が始まります。

『バガヴァッド・ギーター』でも、主が、部分体であるジーヴァを物質エネルギーに植えつけ、そしてその結果としてさまざまな姿や形が発生する、と述べられています。ジーヴァ魂のさまざまな望みやカルマの活動に応じて、さまざまな形の生物が作りだされます。ダーウィンの進化論は生物を精神魂として捉えていないため、不完全な理論と言えます。物質の三様式の動・反動の結果、宇宙内でさまざまな現象が発生しますが、根源の創造者あるいは原因は、この節で*nimitta-mātram*（ニミッタ・マートゥランム）「間接的な原因」と述べられている最高人格主神です。主は、回転する輪に力を加えているにすぎません。マーヤーヴァーディー哲学は、至高のブラフマンがさまざまな姿に変身したと説きますが、それは事実ではありません。主はすべての原因の原因ではありますが、いつでも物質のグナの動・反動を超越した方です。主ブラフマーが『ブラフマ・サムヒター』（第5章・第1節）で述べています。

イーシュヴァラハ　パラマハ　クリシュナハ
īśvaraḥ paramaḥ kṛṣṇaḥ

サチ・チドゥ・アーナンダ・ヴィグラハハ
sac-cid-ānanda-vigrahaḥ

アナーディル　アーディル　ゴーヴィンダハ
anādir ādir govindaḥ

サルヴァ・カーラナ・カーラナンム
sarva-kāraṇa-kāraṇam

数多くの原因と結果がありますが、その根源はシュリー・クリシュナです。

第１８節

स खल्विदं भगवान् कालशक्त्या
गुणप्रवाहेण विभक्तवीर्यः ।

करोत्यकर्तैव निहन्त्यहन्ता
चेष्टा विभूम्नः खलु दुर्विभाव्या ॥ १८ ॥

サ　カハルヴ　イダンム　バハガヴァーン　カーラ・シャクテャー
sa khalv idaṁ bhagavān kāla-śaktyā

グナ・プラヴァーヘーナ　ヴィバハクタ・ヴィーリャハ
guṇa-pravāheṇa vibhakta-vīryaḥ

カローティ　アカルタイヴァ　ニハンティ　アハンター
karoty akartaiva nihanty ahantā

チェーシュター　ヴィブァーンムナハ　カハル　ドゥルヴィバハーヴャー
ceṣṭā vibhūmnaḥ khalu durvibhāvyā

saḥ—その; *khalu*—しかし; *idam*—これ（宇宙）; *bhagavān*—人格主神; *kāla*—時の; *śaktyā*—力によって; *guṇa-pravāheṇa*—自然の様式の相互作用によって; *vibhakta*—分けられて; *vīryaḥ*—（その方の）力; *karoti*—〜に機能する; *akartā*—非行動者; *eva*—ではあるが; *nihanti*—殺す; *ahantā*—非殺害者; *ceṣṭā*—エネルギー; *vibhūmnaḥ*—主の; *khalu*—確かに; *durvibhāvyā*—想像を絶する。

最高人格主神は、想像を絶する自らの力、すなわち時によって、物質自然界の三様式を機能させ、その結果、さまざまな力が表わされる。主は活動しているように見えるが、活動者ではない。殺しているが、殺戮者ではない。このように、主の想像を絶する力だけによって、すべては生じているのである。

要旨解説

この節の*durvibhāvyā*（ドゥルヴィバハーヴャー）は「私たちのちっぽけな知力では想像すらできない」という意味で、また*vibhakta-vīryaḥ*（ヴィバハクタ・ヴィーリャハ）は「さまざまな力に分けられている」という意味です。これが、物質界の創造エネルギーを説明する正しいことばです。神の慈悲をさらに理解できるたとえがひとつあります。国はいつも慈悲深くあるものですが、ときには、法律や秩序を正しく保つために警察力を行使し、そして国に従わない市民が罰せられます。同じように、最高人格主神はいつでも慈悲深く、そして崇高な気質にあふれているのですが、クリシュナとの絆を忘れている個々の魂もいて、物質自然界を支配するために努力します。その努力の結果、さまざまな物質の相互作用に巻きこまれていきます。しかし、力は最高人格主神から出されているのだから、主は活動者である、と考えるのは正しくありません。前の節では*nimitta-mātram*（ニミッタ・マートゥランム）ということばが使われ、至高主は物質界の動・反動から完全に離れている方であると言われています。では、すべてはどのように動かされているのでしょうか。「想像を絶する」ということばが使われ

ています。私たちのちっぽけな頭脳の理解力を超えていることなのです。主の想像を絶する力とエネルギーを受けいれなければ、理解を深めることはできません。機能している力は確かに最高人格主神が用意したものですが、主はいつでもその動きや反動を超絶しています。物質自然が相互に作用して作られるさまざまなエネルギーがさまざまな生物種を作り、かれらの幸福や不幸をも作りだします。

主の行動のすばらしさが『ヴィシュヌ・プラーナ』で述べられています。火は１箇所に置かれ、その火が作りだす熱と光はさまざまな形で機能します。もうひとつ、発電所の例があります。発電所は１箇所にありますが、作られる電力でさまざまな機械が動きます。製品とその製品を作りだしたエネルギー源は同じではありませんが、そのエネルギー源こそが主要な要因ですから、作りだされたものとエネルギー源は同時に同じで異なる、と言えます。ですから、主チャイタンニャが唱える哲学*acintya-bhedābheda-tattva*（アチンテャ・ベーダーベーダ・タットヴァ）は、完璧な理解の方法です。物質界で主は３つの姿、すなわちブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァという姿で現われ、その姿をとおして物質自然の三様式を管理します。ブラフマーの化身で創造し、ヴィシュヌの化身で維持し、シヴァの化身で破壊します。しかし、ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの根源であるガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌは、物質自然の動・反動からつねに離れています。

第１９節

सोऽनन्तोऽन्तकरः कालोऽनादिरादिकृदव्ययः ।
जनं जनेन जनयन्मारयन्मृत्युनान्तकम्　　॥ १९ ॥

ソー　ナントー　ンタ・カラハ　カーロー
so 'nanto 'nta-karaḥ kālo

ナーディル　アーディ・クリドゥ　アヴァヤハ
'nādir ādi-kṛd avyayaḥ

ジャナンム　ジャネーナ　ジャナヤン
janaṁ janena janayan

マーラヤン　ムリテュナーンタカンム
mārayan mṛtyunāntakam

saḥ—主; *anantaḥ*—無限の; *anta-karaḥ*—破壊者; *kālaḥ*—時; *anādiḥ*—始まりのない; *ādi-kṛt*—すべての始まり; *avyayaḥ*—減少することのない; *janam*—生命体; *janena*—生命体によって; *janayan*—誕生の原因になっている; *mārayan*—殺している; *mṛtyunā*—死によって; *antakam*—殺戮者たち。

ドゥルヴァよ。最高人格主神は永遠に存在しているが、時という姿ですべてを抹殺する方でもある。主は一切万物の起源であるが、主に起源はなく、またすべては時ともに枯渇していくが、主は無尽蔵である。生物は父親という代理者をとおして誕生し、死という代理者によって殺される。しかし、主は永遠に誕生と死と無縁の方である。

要旨解説

この節から、最高人格主神の最高の権威と想像を絶する力について学ぶことができます。主はつねに無限の方ですが、それは、主には創造と終焉の時がない、ということを指しています。しかし、主は『バガヴァッド・ギーター』で言われているように（時という形の）「死」でもあります。クリシュナは「わたしは時である。生涯の終わりにすべてを取りさる」と言います。永遠なる時に始まりはありませんが、時がすべての生物の創造者でもあります。その例として挙げられるのが、価値ある石や宝石を無数に作り、なおかつその作りだす力を失わない試金石です。同じように、創造は無数に繰りかえされ、すべてが維持され、そして一定期間の終わりにことごとく破壊されます——しかし、根源の創造者である至高主は無傷で、そしてその力は決して衰えません。二次的創造はブラフマーによって為されますが、ブラフマーは至高主神によって作られます。主シヴァは全創造界を破壊しますが、最終的には主シヴァもヴィシュヌによって消滅させられます。主ヴィシュヌだけが残るのです。ヴェーダ聖歌では、始めにヴィシュヌだけが存在し、終わりに主だけが残る、と言われています。

もうひとつのたとえから、至高主の想像を絶する力が理解できます。近代戦争の歴史で、最高人格主神はヒトラーを作りだし、そのまえにナポレオン・ボナパルトを作り、両者とも戦争で大勢の人々を殺しました。しかし、最後にはナポレオンもヒトラーも殺されています。今でも多くの人々がヒトラーやナポレオンについて本を書いたり、あるいはそのような本を読んだりすることに興味を持っています。毎年のように、ヒトラーが強制収容所で多くのユダヤ人を殺害したことを書いた本が出版されています。ところが、だれがヒトラーを殺したのか、あるいはだれが大量虐殺を発生させたのかということでは、だれも調べる人はいません。主の献愛者は、移りかわる世界の歴史の研究に関心はありません。根源の創造者、維持者、破壊者である主だけに関心を持っています。そして、それがクリシュナ意識運動の目標でもあります。

第２０節

न वै स्वपक्षोऽस्य विपक्ष एव वा
　　परस्य मृत्योर्विशतः समं प्रजाः ।
तं धावमानमनुधावन्त्यनीशा
　　यथा रजांस्यनिलं भूतसङ्घाः ॥ २० ॥

ナ　ヴァイ　スヴァ・パクショー　シャ　ヴィパクシャ　エーヴァ　ヴァー
na vai sva-pakṣo 'sya vipakṣa eva vā

パラッシャ　ムリテョール　ヴィシャタハ　サマンム　プラジャーハ
parasya mṛtyor viśataḥ samaṁ prajāḥ

タンム　ダハーヴァマーナンム　アヌダハーヴァンティ　アニーシャ
taṁ dhāvamānam anudhāvanty anīśā

ヤタハー　ラジャーンムシ　アニランム　ブゥータ・サンガハーハ
yathā rajāṁsy anilaṁ bhūta-saṅghāḥ

na—～ではない; *vai*—しかし; *sva-pakṣaḥ*—仲間; *asya*—最高人格主神の; *vipakṣaḥ*—敵; *eva*—確かに; *vā*—あるいは; *parasya*—至高者の; *mṛtyoḥ*—時という形で; *viśataḥ*—入っている; *samam*—等しく; *prajāḥ*—生命体; *tam*—主に; *dhāvamānam*—動いている; *anudhāvanti*—後ろからついてくる; *anīśāḥ*—生命体に応じて; *yathā*—～として; *rajāṁsi*—埃の粒子; *anilam*—風; *bhūta-saṅghāḥ*—他の物質的要素。

最高人格主神は、永遠な時という姿で物質界に存在し、だれにでも中立の立場をとっている。だれも主の仲間でも、あるいは敵でもない。時に支配されながら、だれもが自分のカルマ、すなわち果報的活動の結果で楽しんだり苦しんだりしている。風が吹いて小さな埃の粒子が空中に舞いあがるように、魂は特定のカルマに応じて、物質生活で苦しんだり楽しんだりしているのである。

要旨解説

最高人格主神はすべての原因の原因ではありますが、私たちの物質的な苦しみや楽しみの責任を負っているわけではありません。至高主は不公平ではないのです。知性に欠ける人は、神は不公平だから、物質界では楽しんでいる人がいるいっぽう、苦しんでいる人もいる、と非難します。しかしこの節は、至高主にはそのような不公平さはない、と断言しています。しかしまた、生命体も決して自由な身ではありません。至高の支配者に対して決別を宣言したとたん、かれらは物質界に送られ、自分の手で幸運を手に入れるために力をつくします。そのように間違って導かれた生命体のために物質界が作られるとき、かれらは自分のカルマ・果報的活動を作りだし、時を利用し、そしてその結果、自分の幸運や不運を作りだしていきます。だれもが作られ、だれもが維持され、だれもがやがて殺されます。この３つに関するかぎり、主はだれにでも平等な方です。苦しむか楽しむかは、私たち自身のカルマによるものです。生命体の立場の優劣、苦しみや楽しみは、自分自身のカルマで生じています。これに関して使われている適切なことばは*anīśāḥ*（アニーシャーハ）で、「自分のカルマで決まる」という意味です。その例として、「政府はどの市民にも政府の影響力や統制力を行使しますが、市民は、各個人の選択しだいでさまざまな境遇を強いられるような状況を自分で作

りだす」という例が挙げられます。この節では、風が吹いて埃の粒子が空中に飛ぶ、という例が挙げられています。雨期になると稲妻が光るようになり、激しい雨が降りはじめ、こうして雨期が森にさまざまな環境を作りだします。神はとても親切な方です——だれにでも等しく機会を提供します——しかし個人のカルマに応じて、ある人は苦しみ、また別の人は楽しむのです。

第２１節

आयुषोऽपचयं जन्तोस्तथैवोपचयं विभुः ।
उभाभ्यां रहितः स्वस्थो दुःस्थस्य विदधात्यसौ ॥ २१ ॥

アーユショー　パチャヤンム　ジャントース
āyuṣo 'pacayaṁ jantos

タタハイヴォーパチャヤンム　ヴィブッフ
tathaivopacayaṁ vibhuḥ

ウバハービャーンム　ラヒタハ　スヴァ・ストホー
ubhābhyāṁ rahitaḥ sva-stho

ドゥフスタハッシャ　ヴィダダハーティ　アサウ
duḥsthasya vidadhāty asau

āyuṣaḥ—寿命の; *apacayam*—減少; *jantoḥ*—生命体の; *tathā*—同じように; *eva*—もまた; *upacayam*—増える; *vibhuḥ*—最高人格主神; *ubhābhyām*—両方の; *rahitaḥ*—自由な; *sva-sthaḥ*—つねに超越的な境地にいる; *duḥsthasya*—カルマの法則下にいる生命体の; *vidadhāti*—与える; *asau*—主。

最高人格主神ヴィシュヌはあらゆる力をそなえ、生命体に果報的活動の結果をさずける。そのため、ある生物の寿命がひじょうに短かったり、別の生物の寿命がひじょうに長かったりしても、主はいつでも超越的な境地にあり、また主の寿命が減少・増加したりすることはありえない。

要旨解説

蚊も主ブラフマーも物質界に住む生物で、至高主の小さな火花、そして部分体です。蚊の短い寿命、そして主ブラフマーのひじょうに長い寿命は、それぞれのカルマの結果に応じて最高人格主神が与えたものです。しかし『ブラフマ・サムヒター』には*karmāṇi nirdahati*（カルマーニ　ニルダハティ）、「主は、献愛者の活動の反動を減少あるいは消滅させる」ということばがあります。同じ事実について『バガヴァッド・ギーター』が*yajñārthāt karmaṇo*

'nyatra（ヤギャールタハートゥ　カルマノー　ニャトゥラ）と述べています。つまり、至高主を満足させるためだけにカルマを履行しなくてはならない、さもなければカルマの動・反動に縛られる、ということです。カルマの法則により、生命体は、永遠な時という規則にしばられながら宇宙をさまよい、ときには蚊、ときには主ブラフマーになったりします。理性ある人にとって、このような体験はなんの益にもなりません。『バガヴァッド・ギーター』（第９章・第25節）が*yānti deva-vratā devān*（ヤーンティ　デーヴァ・ヴラター　デーヴァーン）と私たちに警告しています。つまり、半神崇拝に夢中になっている者は半神の惑星に行き、ピター・祖先の崇拝に夢中になっている者はピターに行く、という教えです。物質的なおこないに心が向けられていれば物質界にいつづけます。しかし献愛奉仕に励んでいる人々は、誕生も死もなく、カルマの法則に影響された多種多様な生物もいない最高人格主神の住居に到達します。生命体が持つべき最善の関心は、献愛奉仕をして、ふるさとへ、神の元へ帰っていくことにあります。シュリーラ・バクティヴィノーダ・タークラがつぎのように助言をしています。「友よ。あなたは、時という自然界の波にもてあそばれている。自分は主の永遠な召使いであることを、どうか理解してほしい。それができれば、問題はすべて終わり、とわの幸福に包まれる」

第２２節

केचित्कर्म वदन्त्येनं स्वभावमपरे नृप ।
एके कालं परे दैवं पुंसः काममुतापरे ॥ २२ ॥

ケーチトゥ　カルマ　ヴァダンティ　エーナンム
kecit karma vadanty enaṁ

スヴァバハーヴァンム　アパレー　ヌリパ
svabhāvam apare nṛpa

エーケー　カーランム　パレー　ダイヴァンム
eke kālaṁ pare daivaṁ

プンムサハ　カーマンム　ウターパレー
puṁsaḥ kāmam utāpare

kecit—ある者たち; *karma*—果報的活動; *vadanti*—説明する; *enam*—その; *svabhāvam*—自然; *apare*—他の者たち; *nṛpa*—ドゥルヴァ王よ; *eke*—ある者たち; *kālam*—時; *pare*—他の者たち; *daivam*—運命; *puṁsaḥ*—生命体の; *kāmam*—望み; *uta*—もまた; *apare*—他の者たち。

ある者は、さまざまな生物に見られる違い、苦しみ、楽しみを、カルマの結果だと説く。またいっぽうで、自然によるものと説いたり、時によるものと説いたり、運命によるものと説いたり、さらに生命体の望みによるもの、と説く者もいる。

要旨解説

ミーマーンサカ（*mīmāṁsaka*）、無神論、天文学者、性信奉者、その他さまざまな推論者など、さまざまな哲学者がいます。しかし結論として言えるのは、私たちを物質界の多種多様な生物種に縛りつけるのは、自分自身の活動である、ということです。どのようにしてそのような生物が作られたのかがヴェーダに説かれています。生命体の望みが作りだしたのです。生命体は、命のない石ころではありません。さまざまな望み、すなわちカーマ（*kāma*）を持っています。ヴェーダは、*kāmo'karṣīt*（カーモー　カルシートゥ）と言います。生命体は本来主の部分体、つまり火本体から出た火の粉のような存在ですが、物質界に転落し、自然界を支配しようとする望みに駆られるようになりました。それは事実です。だれもが、能力のかぎりをつくして物質資源を支配しようとしています。

このカーマ、望みを消すことはできません。望みを捨てればふたたび解放される、と説く哲学者がいます。しかし、望みを放棄することはできません。望みは生命体の兆候のひとつなのですから。望みを失った生命体は、命を持たない石にすぎない。ゆえにシュリーラ・ナローッタマ・ダーサ・タークラは、望みを最高人格主神に仕えることに向けるよう私たちに助言します。そうすれば、私たちの望みは浄化されます。望みが浄化されれば、すべての物質的穢れから解放されます。結論として「多様な生物、そしてその喜びや苦痛について説くさまざまな哲学者の理論はどれも不完全である」ということが言えます。私たちはだれもが神の永遠な召使いであり、その絆を忘れたときに物質界に投げいれられ、そこでさまざまな活動をはじめ、その結果として苦しんだり楽しんだりする――これが正しい結論です。私たちは自分の望みのために物質界という海で溺れているのですが、その望みを浄化させ、主への献愛奉仕に使わなくてはなりません。それができるとき、さまざまな姿や状態で宇宙をさまよいつづける病が終わりを告げるのです。

第２３節

अव्यक्तस्याप्रमेयस्य नानाशक्त्युदयस्य च ।
न वै चिकीर्षितं तात को वेदाथ स्वसम्भवम् ॥ २३ ॥

アヴャクタッシャープラメーヤッシャ
avyaktasyāprameyasya

ナーナー・シャクティ・ウダヤッシャ　チャ
nānā-śakty-udayasya ca

ナ　ヴァイ　チキールシタンム　ターター
na vai cikīrṣitaṁ tāta

コー　ヴェーダータハ　スヴァ・サンムバハヴァンム
ko vedātha sva-sambhavam

avyaktasya—現わされていない方の; *aprameyasya*—超越的な方の; *nānā*—さまざまな; *śakti*—エネルギー; *udayasya*—～を起こす方の; *ca*—もまた; *na*—決してない; *vai*—確かに; *cikīrṣitam*—その計画; *tāta*—我が子よ; *kaḥ*—～である者; *veda*—知ることができる; *atha*—ゆえに; *sva*—自身の; *sambhavam*—根源。

絶対真理者、超越者は、不完全な感覚による努力でも、そして直接の経験でも知ることはできない。主は完璧な物質エネルギーといったさまざまな力の主（ぬし）であり、だれも主の計画や行動を理解することはできない。ゆえに、主はあらゆる原因の根源の原因ではあるけれども、だれも、心による推論で主を知ることはできない。

要旨解説

ここで、「さまざまな理論を提唱する哲学者がいるが、いったいだれが正しいことを言っているのか」という質問があることでしょう。その答は、「絶対真理者、超越者は、直接の経験や推論ではぜったいに理解できない」ということばにつきます。心を使った推論者はカエル博士です。1メートル程度の井戸に住んでいたあるカエルが、自分の井戸の広さを目安にして大西洋の長さや広さを計算しようとした、という話です。しかし、カエル博士にできることではありません。アカデミー会員でも、哲学者でも、教授でも、絶対真理者について推論したり、あるいは理解したりすることなどできるわけがないのです。感覚に限りがあるからです。すべての原因の原因である絶対真理者は、絶対真理者自身が知りえることであり、上昇方法による努力で主に辿りつくことはできません。夜太陽が見えないとき、あるいは日中雲に覆われているときは、太陽が雲の上にあっても、体や心の力を使ったり機械を使ったりしてもその覆いを取りさることはできません。強力な投光器を発明し、屋上に登り、闇夜を照らして太陽を見ようとする試みが成功するわけがありません。そのような投光器はありもしないし、作ることもできません。

この節の*avyakta*（アヴャクタ）「現わされていない」ということばには、いわゆる高度な科学的知識の力を使っても絶対真理者は現わすことができないという意味がこめられています。超越者は、私たちの直接の体験では理解できません。絶対真理者の理解は、太陽が雲に、あるいは夜の闇に包まれている状態と比較できます。つまり、太陽が独自の軌道にしたがって朝昇れば、太陽そのものも、あたりも、自分も見ることができるようになります。自己を悟るこの理解の仕方をアートマ・タットヴァ（*ātma-tattva*）といいます。しかし、このアートマ・タットヴァの段階に来なければ、自分が生まれた時のまま、すなわち無知にとどまらなくてはなりません。このような状況下では、だれも最高人格主神を理解することはできません。主は、ヴェーダ経典が*parāsya śaktir vividhaiva śrūyate*（パラーッシャ　チャクティル　ヴィヴィダハイヴァ　シュルーヤテー）と述べているように、さまざまなエネルギーをそなえています

（『チャタンニャ・チャリタームリタ』マデャ・第13章・第65節・要旨解説）。主は永遠なる時という力もそなえています。私たちが見ている、あるいは体験している物質エネルギーだけではなく、時の流れのなかで、必要なときに多くのエネルギーを表わします。物質的科学者は、さまざまなエネルギーの１部分を研究しているにすぎません。多様なエネルギーのひとつを取りあげ、限られた知識にもとづいてそのエネルギーを理解しようとしているのですが、物質的科学の力では絶対真理者を知りつくすことはできません。物質的科学者には、将来なにが起こるか予想できません。しかし、バクティ・ヨーガは、いわゆる高度な科学的知識とはまったく次元が違う方法です。献愛者は至高者にすべてをゆだね、そして主はいわれのない慈悲の心から献愛者に自らをしめします。『バガヴァッド・ギーター』で*dadāmi buddhi-yogaṁ tam*（ダダーミ　ブッディ・ヨーガンム　タンム）と言われています。主は言います、「わたしは献愛者に知性をさずける」と。どのような知性を？　*Yena mām upayānti te*（イェーナ　マーンム　ウパヤーンティ　テー）。主は、無知の大海を渡りきり、ふるさとへ、神の元へ帰ることのできる知性をさずけるのです。結論として、すべての原因の原因である絶対真理者、あるいは至高のブラフマンは、哲学的思索では理解できないけれども、献愛者は主の蓮華の御足に完全に身をゆだねているからこそ、主がみずからを献愛者にしめす、ということが言えます。ですから『バガヴァッド・ギーター』は、絶対真理者がこの惑星に降誕したときに自ら語った啓示経典として受けいれなくてはなりません。知性ある人は、神を理解したいのであれば、この超越的な経典を真正な精神指導者に導かれて学ばなくてはなりません。そうすることで、クリシュナをかんたんに、そしてありのままに理解することができます。

第２４節

न चैते पुत्रक भ्रातुर्हन्तारो धनदानुगाः ।
विसर्गादानयोस्तात पुंसो दैवं हि कारणम् ॥ २४ ॥

ナ　チャイテー　プトゥラカ　ブァラートゥル
na caite putraka bhrātur

ハンターロー　ダハナダーヌガーハ
hantāro dhanadānugāḥ

ヴィサルガーダーナヨース　ターター
visargādānayos tāta

プンムソー　ダイヴァンム　ヒ　カーラナンム
puṁso daivaṁ hi kāraṇam

na—決して～ではない; *ca*—もまた; *ete*—これらすべて; *putraka*—我が子よ; *bhrātuḥ*—お前の弟の; *hantāraḥ*—殺害者; *dhanada*—クヴェーラの; *anugāḥ*—従者; *visarga*—誕生

の; *ādānayoḥ*—死の; *tāta*—我が子よ; *puṁsaḥ*—生物の; *daivam*—至高者; *hi*—確かに; *kāraṇam*—その原因。

我が子よ。クヴェーラの子孫であるこのヤクシャ族は、おまえの弟のほんとうの殺害者ではない。生物の誕生と死は、すべての原因の原因である至高主によって起こされている。

第２５節

स एव विश्वं सृजति स एवावति हन्ति च ।
अथापि ह्यनहङ्कारान्नाज्यते गुणकर्मभिः ॥ २५ ॥

サ　エーヴァ　ヴィシュヴァンム　スリジャティ
sa eva viśvaṁ sṛjati

サ　エーヴァーヴァティ　ハンティ　チャ
sa evāvati hanti ca

アタハーピ　ヒ　アナハンカーラーン
athāpi hy anahaṅkārān

ナージャテー　グナ・カルマビヒ
nājyate guṇa-karmabhiḥ

saḥ—主; *eva*—確かに; *viśvam*—宇宙; *sṛjati*—創造する; *saḥ*—主; *eva*—確かに; *avati*—維持する; *hanti*—破壊する; *ca*—もまた; *atha api*—さらに; *hi*—確かに; *anahaṅkārāt*—自我がない状態であることから; *na*—ではない; *ajyate*—巻きこまれる; *guṇa*—物質自然の様式によって; *karmabhiḥ*—活動によって。

最高人格主神はこの物質界を創造し、維持し、一定期間後に破壊するが、その活動を超絶した方であるためるために、そのような行動によって自我や物質自然の様式に影響されることはない。

要旨解説

この節にある*anahaṅkāra*（アナハンカーラ）は「自我がない」という意味です。条件づけられた魂には偽の自我があり、自分のカルマの結果として、物質界でさまざまな肉体を得ます。ときには半神の体を得て、その体が自分である考える。同じように、犬の体を得たときには、やはりその体が自分だと思う。しかし最高人格主神の場合、体と魂という違いはありません。ですから『バガヴァッド・ギーター』では、「クリシュナをふつうの人間として考える者は、主の超越的な特質を知らないのであり、救いようのない愚か者である」と明言されています。

主は言います、*na māṁ karmāṇi limpanti*（ナ　マーンム　カルマーニ　リンムパンティ）（『バガヴァッド・ギーター』第４章・第14節）。主は物質自然の様式に影響されていないために、なにをしてもその行動に影響されることはありません。私たちの場合、肉体を持っているということそのものが物質自然の様式に影響されている証拠です。主はアルジュナに、「あなたもわたしもこれまで多くの誕生を経てきた。しかし、わたしはそのすべてを覚えているがあなたは覚えていない」言います。それが生命体、つまり条件づけられた魂と至高の魂の違いです。超霊魂、最高人格主神に物質の肉体はありません、そしてその肉体を持たないがゆえに、自分がする活動からいっさい影響を受けません。クリシュナの体は物質の徳性の様式が凝縮された結果である、と考える多くのマーヤーヴァーディー哲学者がおり、クリシュナの魂とクリシュナの体を区別して考えます。しかし事実として言えるのは、条件づけられた魂の肉体は、たとえその魂が物質自然の徳性を十分にそなえているとしても結局は物質ですが、クリシュナの体は決して物質ではない、ということです。超越的な体なのです。クリシュナは、偽りで一時的な体と自分を同一視することはないため、クリシュナに偽の自我はありません。主の体はつねに永遠で、根源の精神的な体で物質界に降誕します。このことは『バガヴァッド・ギーター』で*paraṁ bhāvam*（パランム　バハーヴァンム）ということばで説明されています。*Paraṁ bhāvam*と*divyam*（ディヴャンム）ということばは、クリシュナの個性を理解するにあたって特に重要な意味が含まれています。

第２６節

एष भूतानि भूतात्मा भूतेशो भूतभावनः ।
स्वशक्त्या मायया युक्तः सृजत्यत्ति च पाति च ॥ २६ ॥

エーシャ　ブゥーターニ　ブゥータートゥマー
eṣa bhūtāni bhūtātmā

ブゥーテーショー　ブゥータ・バハーヴァナハ
bhūteśo bhūta-bhāvanaḥ

スヴァ・シャクテャー　マーヤヤー　ユクタハ
sva-śaktyā māyayā yuktaḥ

スリジャティ　アッティ　チャ　パーティ　チャ
sṛjaty atti ca pāti ca

eṣaḥ—この; *bhūtāni*—創造された生物; *bhūta-ātmā*—全生命体の超霊魂; *bhūta-īśaḥ*—だれをも支配する方; *bhūta-bhāvanaḥ*—だれをも維持する方; *sva-śaktyā*—自分の勢力をとおして; *māyayā*—外的力; *yuktaḥ*—そのような媒体をとおして; *sṛjati*—創造する; *atti*—破壊する; *ca*—そして; *pāti*—維持する; *ca*—そして。

最高人格主神は全生物の超霊魂である。主はだれをも支配し、維持する方である。外的勢力という媒体をとおして、主は全生物を創造し、維持し、そして破壊する。

要旨解説

創造には２種類の力が使われます。主は、外的勢力すなわち物質エネルギーを使って物質界を創造しますが、精神界は主の内的勢力の現われです。主はつねに内的勢力とかかわっていますが、物質エネルギーからは離れた境地にあります。そのことについて主は『バガヴァッド・ギーター』（第９章・第４節）で、*mat-sthāni sarva-bhūtāni na cāhaṁ teṣv avasthitaḥ*（マトゥ・スタハーニ　サルヴァ・ブゥーターニ　ナ　チャーハンム　テーシュヴ　アヴァスティタハ）「全生命体はわたしによって、わたしの勢力によって支えられている、しかしわたしはどこにでもいるわけではない」と言います。主はいつでも精神界にいます。物質界であっても、至高主が自ら存在する場所は、どこであっても精神界と考えられています。たとえば、主は寺院で純粋な献愛者たちに崇拝されていますから、寺院は精神界と考えなくてはなりません。

第２７節

तमेव मृत्युममृतं तात दैवं
सर्वात्मनोपेहि जगत्परायणम् ।
यस्मै बलिं विश्वसृजो हरन्ति
गावो यथा वै नसि दामयन्त्रिताः ॥ २७ ॥

タンム　エーヴァ　ムリテュンム　アムリタンム　ターター　ダイヴァンム
tam eva mṛtyum amṛtaṁ tāta daivaṁ

サルヴァートゥマノーペーヒ　ジャガトゥ・パラーヤナンム
sarvātmanopehi jagat-parāyaṇam

ヤスマイ　バリンム　ヴィシュヴァ・スリジョー　ハランティ
yasmai baliṁ viśva-sṛjo haranti

ガーヴォー　ヤタハー　ヴァイ　ナシ　ダーマ・ヤントゥリターハ
gāvo yathā vai nasi dāma-yantritāḥ

tam—主に; *eva*—確かに; *mṛtyum*—死; *amṛtam*—不死; *tāta*—我が子よ; *daivam*—至高者; *sarva-ātmanā*—あらゆる面で; *upehi*—身をゆだねる; *jagat*—世界の; *parāyaṇam*—究極の目標; *yasmai*—～である方に; *balim*—捧げ物; *viśva-sṛjaḥ*—ブラフマーのような半神たちすべて; *haranti*—身に付ける; *gāvaḥ*—牡牛; *yathā*—～のように; *vai*—間違いなく; *nasi*—鼻に; *dāma*—ひもで; *yantritāḥ*—支配されて。

ドゥルヴァよ。世界の繁栄の究極目標である最高人格主神に身をゆだねるのだ。主ブラフマーを筆頭に、半神をも含むだれもが主の支配下にある。牡牛が、鼻先につけられたひもに動かされて飼い主に支配されているように。

要旨解説

物質的な病とは、至高の支配者との離別を宣言することをさします。物質存在は、至高の支配者を忘れて物質自然界を支配しようと望むことからはじまるのです。物質界にいるだれもが力のかぎりをつくして最高の支配者になろうとしています——個人として、国家として、社会として、そしてその他多くの方法をとおして。ドゥルヴァ・マハーラージャは祖父から戦いをやめるよう助言を受けましたが、それはドゥルヴァがヤクシャ族全体を抹殺しようとする個人的な野心に固執していたことを祖父が憂慮していたからです。ですから、この節にあるように、祖父スヴァーヤンブヴァ・マヌは、至高の支配者の境地について説明することで、ドゥルヴァの最後の問題点である誤った野心を根絶したいと考えました。この節の *mṛtyum amṛtam*（ムリテュンム　アムリタンム）「死と不死」ということばは重要です。『バガヴァッド・ギーター』で主は、「わたしは、悪魔たちからすべてを奪いさる究極の死である」と言っています。悪魔たちは、物質自然界の主人として生存競争に奔走し、繰りかえし死に直面し、物質界との網の目のような癒着関係を作りだしています。主は悪魔たちにとって死そのものですが、献愛者にはアムリタ（*amṛta*）、すなわち永遠な生活です。主にいつも仕えている献愛者たちはすでに不滅の生活を手にいれています。現世でしていることすべてを来世でもするからです。物質的な体を精神的な体に交換するにすぎません。悪魔とは違い、献愛者は肉体をこれ以上変えることはありません。つまり、主は同時に死でも不死でもあります。悪魔にとっては死、そして献愛者にとっては不死ということです。ドゥルヴァ・マハーラージャは個人的な野心を捨てて主にすっかり身をゆだねるよう助言を受けています。「なぜ、半神が崇拝されるのか」という質問があるかもしれません。その答はこの節にあります。半神は知性に欠ける人々に崇拝されている、ということです。半神自身は、究極的に最高人格主神の満足のために、さまざまな儀式を受けいれているのです。

第２８節

यः पञ्चवर्षो जननीं त्वं विहाय
　　मातुः सपत्न्या वचसा भिन्नमर्मा ।
वनं गतस्तपसा प्रत्यगक्ष-
　　माराध्य लेभे मूर्ध्नि पदं त्रिलोक्याः ॥ २८ ॥

ヤハ　パンチャ・ヴァルショー　ジャナニーンム　トゥヴァンム　ヴィハーヤ
yaḥ pañca-varṣo jananīṁ tvaṁ vihāya

マートゥフ　サパトゥニャー　ヴァチャサー　ビヒンナ・マルマー
mātuḥ sapatnyā vacasā bhinna-marmā

ヴァナンム　ガタス　タパサー　プラテャグ・アクシャンム
vanaṁ gatas tapasā pratyag-akṣam

アーラーデャ　レーベヘー　ムールドゥニ　パダンム　トゥリ・ローキャーハ
ārādhya lebhe mūrdhni padaṁ tri-lokyāḥ

yaḥ—～である者; *pañca-varṣaḥ*—５歳; *jananīm*—母親; *tvam*—お前; *vihāya*—捨て去っている; *mātuḥ*—母親の; *sa-patnyāḥ*—側室の; *vacasā*—言葉によって; *bhinna-marmā*—心を傷つけられて; *vanam*—森に; *gataḥ*—行った; *tapasā*—苦行によって; *pratyak-akṣam*—至高主; *ārādhya*—崇拝している; *lebhe*—到達した; *mūrdhni*—頂点に; *padam*—位置; *tri-lokyāḥ*—三界の。

ドゥルヴァよ。おまえは５歳のとき、継母のことばにたいそう傷つけられ、大胆にも母親の保護を捨て、最高人格主神の悟りを求めてヨーガに没頭するために森に入った。その結果、おまえはすでに三界の頂点に到達している。

要旨解説

マヌは自分の家系に、５歳の若さで最高人格主神を瞑想し、６ヶ月で至高主に出会うことができたドゥルヴァ・マハーラージャがいることを誇りに思っています。事実、ドゥルヴァ・マハーラージャはマヌ王家の、すなわち人間の家系にとって誉れ高い人物です。人類はマヌからはじまっています。「人間」はサンスクリット語でマヌッシャ（*manuṣya*）といい、それは「マヌの子孫」という意味です。ドゥルヴァ・マハーラージャは、スヴァーヤンブヴァ・マヌの家系の誉れであることはもちろん、人間社会全体の誉れでもあります。ドゥルヴァ・マハーラージャはすでに至高主神に服従した人物だったからこそ、そのような魂にふさわしくないことをしないよう求められたのです。

第２９節

तमेनम्रात्मनि मुक्तविग्रहे
　　व्यपाश्रितं निर्गुणमेकमक्षरम् ।
आत्मानमन्विच्छ विमुक्तमात्मदृग्
　　यस्मिन्निदं भेदमसत्प्रतीयते ॥ २९ ॥

タンム　エーナンム　アンガートゥマニ　ムクタ・ヴィグラヘー
tam enam aṅgātmani mukta-vigrahe

ヴャパーシュリタンム　ニルグナンム　エーカンム　アクシャランム
vyapāśritaṁ nirguṇam ekam akṣaram

アートゥマーナンム　アンヴィッチャ　ヴィムクタンム　アートゥマ・ドゥリグ
ātmānam anviccha vimuktam ātma-dṛg

ヤスミンー　イダンム　ベヘーダンム　アサトゥ　プラティーヤテー
yasminn idaṁ bhedam asat pratīyate

tam—主に; *enam*—それ; *aṅga*—ドゥルヴァよ; *ātmani*—こころに; *mukta-vigrahe*—怒りのない; *vyapāśritam*—位置して; *nirguṇam*—超越的; *ekam*— 1 つ; *akṣaram*—完全無欠のブラフマン; *ātmānam*—自己; *anviccha*—見つけようとする; *vimuktam*—穢れていない; *ātma-dṛk*—超霊魂に顔を向ける; *yasmin*—〜の中に; *idam*—この; *bhedam*—識別; *asat*—非現実の; *pratīyate*—〜に見える。

ドゥルヴァよ。だから、どうか気持ちを至高の人物、完全無欠のブラフマンに向けてほしい。自分本来の境地に立ち、最高人格主神を見るのだ。そうすれば、自己の悟りの力によって、物質界にあるさまざまな違いが一時的であることに気づくだろう。

要旨解説

生命体は、自己を悟る境地に応じて３種類の視野を持っています。肉体観念にいれば、さまざまな肉体にもとづく見方をするようになります。魂は多種多様な物質の姿を受けいれますが、そのような肉体の変遷にかかわらず、永遠です。ですから、肉体観念で生命体を見ると、さまざまな姿として存在しているように見えます。主マヌは、ドゥルヴァ・マハーラージャにそのような見方を変えるよう求めています。ヤクシャ族を自分とは違う姿として、また敵として見ていたからです。しかしじつは敵でも友でもありません。だれもがカルマの法則によってさまざまなタイプの肉体を変えていますが、精神的正体にもとづいて見れば、この法則に囚われた見方はしなくなります。別の言い方をすれば、『バガヴァッド・ギーター』（第18章・第54節）のことばどおりになります。

ブラフマ・ブゥータハ　プラサンナートゥマー
brahma-bhūtaḥ prasannātmā

ナ　ショーチャティ　ナ　カークシャティ
na śocati na kāṅkṣati

サマハ　サルヴェーシュ　ブゥーテーシュ
samaḥ sarveṣu bhūteṣu

マドゥ・バハクティンム　ラバハテー　パラーンム
mad-bhaktiṁ labhate parām

すでに解脱の境地にある献愛者は、外側の肉体にかかわる違いを見ることはありません。すべての生物を精神的な魂として、主の永遠なる召使いとして見ます。ドゥルヴァ・マハーラージャは主マヌに、その視野に立って生命体を見るよう助言を受けました。偉大な献愛者だったからこそ、ありきたりの視野で他の生命体を見ないよう、とくに戒められたのです。マヌは間接的にドゥルヴァ・マハーラージャに、ドゥルヴァが物質的な愛着から弟を親族と見、ヤクシャ族を敵と見た、と指摘しています。そのような区別した物の見方は、主の永遠な召使いという本来の立場にもどったときに消えていきます。

第３０節

त्वं प्रत्यगात्मनि तदा भगवत्यनन्त
आनन्दमात्र उपपन्नसमस्तशक्तौ ।
भक्तिं विधाय परमां शनकैरविद्या-
ग्रन्थिं विभेत्स्यसि ममाहमिति प्ररूढम् ॥ ३० ॥

トゥヴァンム　プラテャグ・アートゥマニ　タダー　バハガヴァティ　アナンタ
tvaṁ pratyag-ātmani tadā bhagavaty ananta

アーナンダ・マートゥラ　ウパパンナ・サマスタ・シャクタウ
ānanda-mātra upapanna-samasta-śaktau

バハクティンム　ヴィダハーヤ　パラマーンム　シャナカイル　アヴィデャー・
bhaktiṁ vidhāya paramāṁ śanakair avidyā-

グランティンム　ヴィベヘートゥッシャシ　ママーハンム　イティ　プラルーダハンム
granthiṁ vibhetsyasi mamāham iti prarūḍham

tvam—おまえ; *pratyak-ātmani*—超霊魂に; *tadā*—その時; *bhagavati*—最高人格主神に; *anante*—無限な方; *ānanda-mātre*—あらゆる喜びの源; *upapanna*—～を持った; *samasta*—すべて; *śaktau*—勢力; *bhaktim*—献愛奉仕; *vidhāya*—捧げることで; *paramām*—至高の; *śanakaiḥ*—すぐに; *avidyā*—幻想の; *granthim*—結び目; *vibhetsyasi*—ほどくだろう; *mama*—私の; *aham*—私は; *iti*—そのように; *prarūḍham*—堅く固定されて。

自分にとって自然な境地をそのように取りもどし、すべての喜びの力強い源であり、超霊魂としてすべての生物のうちにいる至高主に仕えることで、おまえは「私は」とか「私の」という幻想の考えをやがて忘れていくだろう。

要旨解説

ドゥルヴァ・マハーラージャは５歳のときに最高人格主神に出会ったため、すでに解脱を達成した人物でした。しかし、解脱を達成していてもマーヤーの力にまどわされ、肉体観念

に囚われて自分をウッタマの兄だと考えていました。全物質界は「私は」とか「私の」という原理で動いています。これが物質界の魅力の原点です。この幻想の概念——「私は」と「私の」——に魅了されていれば、高尚・低俗さまざまな環境で物質界にとどまらなくてはなりません。主クリシュナの恩寵によって、聖者たちや主マヌはドゥルヴァ・マハーラージャに、「私は」とか「私の」という物質的概念を持ちつづけてはいけない、と戒めました。主への献愛奉仕だけで、ドゥルヴァの幻想はいともたやすく消しさることができたのです。

第３１節

संयच्छ रोषं भद्रं ते प्रतीपं श्रेयसां परम् ।
श्रुतेन भूयसा राजन्नगदेन यथामयम् ॥ ३१ ॥

サンムヤッチャ　ローシャンム　バハドゥランム　テー
saṁyaccha roṣaṁ bhadraṁ te

プラティーパンム　シュレーヤサーンム　パランム
pratīpaṁ śreyasāṁ param

シュルテーナ　ブゥーヤサー　ラージャン–
śrutena bhūyasā rājann

アガデーナ　ヤタハーマヤンム
agadena yathāmayam

saṁyaccha—ひたすら抑制せよ; *roṣam*—怒り; *bhadram*—あらゆる幸運; *te*—おまえに; *pratīpam*—敵; *śreyasām*—あらゆる素晴らしさの; *param*—主要なもの; *śrutena*—聞くことで; *bhūyasā*—つねに; *rājan*—王よ; *agadena*—薬を使った治療で; *yathā*—～として; *āmayam*—病気。

王よ。私が話したことをよく考えるのだ。この教えは病気を治す薬のように効力をあらわす。怒りを抑えよ。怒りは精神的悟りの道の最大の敵である。私はおまえの幸運を心から願っている。私の教えに従いなさい。

要旨解説

ドゥルヴァ・マハーラージャは解脱を達成した魂であり、じっさい、だれかに怒りを感じていたわけではありません。しかし統治する立場にあったことから、国の法律や秩序を守るためにも、ときには怒ることも義務とされます。弟のウッタマに過失はなかったのですが、ひとりのヤクシャ族に殺害されました。ドゥルヴァ・マハーラージャは王でしたから、その犯罪者を殺すことはドゥルヴァにとって（目には目を、歯には歯を、という）義務だったの

です。宣戦が布告されたあと、ドゥルヴァ・マハーラージャは敢然と戦い、ヤクシャ族を十分に罰しました。しかし怒りというものは、ひとたび火がつくと、際限なく燃えあがるものです。そこでマヌは、ドゥルヴァ・マハーラージャの王としての怒りが限度を超さないよう、優しい思いから孫を戒めました。ドゥルヴァ・マハーラージャは祖父の意図を理解し、すぐに戦いをやめました。この*śrutena bhūyasā*（シュルテーナ　ブフーヤサー）は「いつも聞くことで」という意味で、この節では重要な意味がこめられています。献愛奉仕についていつも聞くことで、献愛奉仕の道では有害な怒りの力を抑えることができます。シュリーラ・パリークシット・マハーラージャは、主の崇高な娯楽を聞きつづけることが物質的病をすべて治す万能薬であると言いました。ですから、だれでも最高人格主神について聞きつづけなくてはなりません。聞くことでいつも心は落ち着き、その結果、精神生活の高まりが邪魔されることはありません。

ドゥルヴァ・マハーラージャが邪悪な者たちに激高したのはまったく適切なことでした。このことで、ナーラダに教えをさずかって献愛者になったヘビが、「誰も噛んではいけない」と諭された逸話があります。ヘビはほかの生き物をかみ殺す本性を持っていますが、そのヘビは献愛者になったことから、それを禁じられました。ところが住民たちはヘビが暴力を放棄したことに乗じて、とくに子どもたちは、ヘビに石をぶつけるようになりました。それでもヘビは精神指導者の教えを守り、だれも噛むことはありませんでした。しばらくして精神指導者ナーラダに会ったとき、ヘビは窮状を訴えました。「私は、悪気のない者を噛むという悪癖を捨てました。しかし、みんな私に石を投げていじめるのです」。このことばを聞いたナーラダ・ムニはヘビに教えました。「噛んではいけない。しかし、噛もうとする意思表示をして鎌首を膨らませることを忘れてはいけない。そうすれば、みんなおまえから離れていく」。このように、献愛者はどんなときでも暴力はふるいません。あらゆる善なる気質をさずかる資格を持っているのです。しかし一般社会では、他人から危害を受けることがありますから、怒ることを忘れてはなりません。その悪人を追い払うためにも。

第３２節

येनोपसृष्टात्पुरुषाल्लोक उद्विजते भृशम् ।
न बुधस्तद्वशं गच्छेदिच्छन्नभयमात्मनः ॥ ३२ ॥

イェーノーパスリシュタートゥ　プルシャール
yenopasṛṣṭāt puruṣāl

ローカ　ウドゥヴィジャテー　ブフリシャンム
loka udvijate bhṛśam

ナ　ブダハス　タドゥ・ヴァシャンム　ガッチェードゥ
na budhas tad-vaśaṁ gacched

イッチャンー　アバハヤンム　アートゥマナハ
icchann abhayam ātmanaḥ

yena—それによって; *upasṛṣṭāt*—圧倒されて; *puruṣāt*—その人物によって; *lokaḥ*—だれもが; *udvijate*—恐れて; *bhṛśam*—非常に; *na*—決してない; *budhaḥ*—博識な人物; *tat*—怒りの; *vaśam*—支配されて; *gacchet*—行くべきである; *icchan*—望んでいる; *abhayam*—恐れのないこと、解脱; *ātmanaḥ*—自己の。

物質界から解放されたいと願う人物は、怒りにあやつられてはならない。怒りに惑わされた人間は、人々の不安の元凶になるからである。

要旨解説

献愛者、あるいは神聖な人物は、他人に恐怖を与える元凶になってはいけませんし、だれも献愛者に恐怖を与えてはいけません。敵意を持たずに人と接する人は、だれも敵を作りません。しかしイエス・キリストの場合、敵がいたためにイエスはその敵に磔にされました。邪悪な心を持つ者たちはいつの世でもいるものですし、かれらは神聖な人物にでさえ欠点を見つけようとします。しかし神聖な気質をもつ人物は、最悪の挑発を受けても決して怒りません。

第３３節

हेलनं गिरिशभ्रातुर्धनदस्य त्वया कृतम् ।
यज्जघ्निवान् पुण्यजनान् भ्रातृघ्नानित्यमर्षितः ॥ ३३ ॥

ヘーラナンム　ギリシャ・ブッラートゥル
helanaṁ giriśa-bhrātur

ダハナダッシャ　トゥヴァヤー　クリタンム
dhanadasya tvayā kṛtam

ヤジ　ジャグッニヴァーン　プニャ・ジャナーン
yaj jaghnivān puṇya-janān

ブッラートゥリ・グッナーン　イティ　アマルシタハ
bhrātṛ-ghnān ity amarṣitaḥ

helanam—不敬な行為; *giriśa*—主シヴァの; *bhrātuḥ*—その弟; *dhanadasya*—クヴェーラに; *tvayā*—お前によって; *kṛtam*—行なわれた; *yat*—なぜなら; *jaghnivān*—お前は殺した; *puṇya-janān*—ヤクシャ族; *bhrātṛ*—お前の弟の; *ghnān*—殺害者たち; *iti*—そのように（考えている）; *amarṣitaḥ*—怒って。

ドゥルヴァよ。おまえは、ヤクシャ族が自分の弟を殺したと考えたために、かれらを大勢殺害した。しかしおまえの行為は、主シヴァの兄弟で半神たちの財産を管理するクヴェーラの心を刺激している。クヴェーラと主シヴァに不敬をはたらいていることを認識するのだ。

要旨解説

主マヌはドゥルヴァ・マハーラージャに、「おまえの行為は主シヴァと、その兄弟であるクヴェーラを冒涜している。ヤクシャ族はクヴェーラの家系に属しているからである」と教えています。ふつうの人々ではなかったのです。ゆえに、このような人々は*puṇya janān*（プニャ　ジャナーン）「敬虔な人々」と呼ばれています。しだいにクヴェーラの心は動揺していたため、ドゥルヴァ・マハーラージャはクヴェーラの心を静めるよう助言を受けたのでした。

第３４節

तं प्रसादय वत्साशु सन्नत्या प्रश्रयोक्तिभिः ।
न यावन्महतां तेजः कुलं नोऽभिभविष्यति ॥ ३४ ॥

タンム　プラサーダヤ　ヴァトゥサーシュ
taṁ prasādaya vatsāśu

サンナテャー　プラシュラヨークティビヒヒ
sannatyā praśrayoktibhiḥ

ナ　ヤーヴァン　マハターンム　テージャハ
na yāvan mahatāṁ tejaḥ

クランム　ノー　ビヒバハヴィッシャティ
kulaṁ no 'bhibhaviṣyati

tam—彼を; *prasādaya*—なだめる; *vatsa*—我が子; *āśu*—すぐに; *sannatyā*—お辞儀をすることで; *praśrayā*—敬意をこめた振る舞いによって; *uktibhiḥ*—礼儀を尽くした葉で; *na yāvat*—～の前に; *mahatām*—偉大な人物たちの; *tejaḥ*—強い怒り; *kulam*—家族; *naḥ*—我々の; *abhibhaviṣyati*—影響を及ぼす。

我が子よ。このことを考慮し、すぐにクヴェーラに礼儀を尽くしたことばや祈りをささげ、なだめなくてはならない。かれの激しい怒りが我々の家系に混乱をもたらさないように。

要旨解説

一般的なつきあいのなかでは、だれとでも友好的な関係を築く必要がありますから、ましてクヴェーラのような高尚な半神に対しては十分な注意をはらわなくてはなりません。自分の行為がもとでだれかを怒らせ、そのために個人、家族、社会を傷つけるようなことがあってはなりません。

第３５節

एवं स्वायम्भुवः पौत्रमनुशास्य मनुर्ध्रुवम् ।
तेनाभिवन्दितः साकमृषिभिः स्वपुरं ययौ ॥ ३५ ॥

エーヴァンム　スヴァーヤンムブゥヴァハ　パウトゥランム
evaṁ svāyambhuvaḥ pautram

アヌシャーッシャ　マヌル　ドゥルヴァンム
anuśāsya manur dhruvam

テーナービヒヴァンディタハ　サーカンム
tenābhivanditaḥ sākam

リシビヒヒ　スヴァ・プランム　ヤヤウ
ṛṣibhiḥ sva-puraṁ yayau

evam—このように; *svāyambhuvaḥ*—主スヴァーヤンブヴァ・マヌ; *pautram*—自分の孫に; *anuśāsya*—教えを授けたあと; *manuḥ*—主マヌ; *dhruvam*—ドゥルヴァ・マハーラージャに; *tena*—彼によって; *abhivanditaḥ*—～にお辞儀を捧げたあと; *sākam*—一緒に; *ṛṣibhiḥ*—聖者たちと; *sva-puram*—自分の住居へ; *yayau*—行った。

こうして、スヴァーヤンブヴァ・マヌは孫ドゥルヴァ・マハーラージャに教えをさずけたあと、ドゥルヴァから敬意をこめたお辞儀を受けた。そして主マヌは、偉大な聖者たちとともにそれぞれの住居にもどっていった。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第４編・第11章、「スヴァーヤンブヴァ・マヌ、ドゥルヴァ・マハーラージャに停戦を求める」の要旨解説を終了します。